2019.01.21

日本初 ソーシャリー・エンゲイジド・アートへの支援
川村文化芸術振興財団ソーシャリー・エンゲイジド・アート支援助成

日本に住む脱北者とアーティストとの共同プロジェクト

琴 仙姫（クム・ソニ）『朝露』に決定！

特別助成はパヴェル・ラツャック（Pavel Ruzyak）

photo by Park Jong-ho

川村文化芸術振興財団（理事長 川村喜久）では、日本初となるソーシャリー・エンゲイジド・アートに対する支援助成事業を 2017 年に開始しました。
第 1 回目の支援対象は演出家高山明（PortB）『新・東京修学旅行プロジェクト』に決定し、第 2 回目となる今回は、日本国内外から 20 件 (海外 9 件、国内 11 件) の応募の中から、対象者が決定しましたので下記の通りご案内いたします。

■2019 年度助成対象プロジェクト
申請者名：琴 仙姫（クム・ソニ）
申請プロジェクト名：『朝露』
助成金額：上限 400 万円

■2019 年度特別助成
申請者名 : : パヴェル・ラツャック（Pavel Ruzyak）
申請プロジェクト名：日本–コミュニティ映像編集プロジェクト
助成金額：50 万円

■2019 年度助成対象プロジェクト『朝露』とは

このプロジェクトは、日本に住む脱北者、元北朝鮮日本人妻、アーティストとの共同アートプロジェクトです。
現在日本には約 200 人あまりの北朝鮮脱北者が住んでいる。日本に住む脱北者の多くは 1960 年代後半から 70 年後半にかけて行われた「帰国事業」により北朝鮮に移住していった在日朝鮮人たち、或いはその子孫たちである。彼らは当時「地上の楽園」として報道された幻想を信じ移住して行った。殆どは現在の韓国出身の在日朝鮮人たちであった。見ず知らずの土地に移住した「帰国者」たちはその後、朝鮮戦争復興の貧窮真っ直中にある北朝鮮で過酷な生活を余儀なくされることになった。

日本に住む脱北者たちは、脱北者という事実を隠す必要に迫られている。
隠さないと日々の生活に困難を経験するためだ。
このような状況下で、実際に日本で暮らす脱北者の人々に出会い、アーティストとのコラボレーションでワークショップを行う。
作品を一緒に制作したり、話を聞いて録音したりする経験をとおして作家達自身がインスピレーションを培いながら、作品制作と展示に繋げていく。
個人的な出会いと、ワークショップなどを通して作り出されたそれぞれの作家と脱北者または日本人妻の作品を、展示とシンポジウムの形で発表し、ディスカッションの輪を広げていく。
プロジェクトのタイトルである「朝露」は、韓国の 80 年代の学生運動で歌われた歌であり、暗い夜を過ごした後、純粋で美しいものに再生していく様子を象徴している。

琴 仙姫（クム・ソニ）

■琴 仙姫（クム・ソニ）略歴

アーティスト、映像作家。東京生まれ。2005 年カリフォルニア芸術大学 映像科 修士課程修了。
2011 年東京芸術大学先端芸術表現領域 美術博士課程修了。
2011 年より 2015 年まで韓国の延世大学などで非常勤講師として働きながら、ソウル文化財団からの支援を受け脱北者たちとのアートプロジェクトを推進。
2016 年から 2017 年までポーラ美術振興財団在外研修員としてロンドンにて研修。
Live Art Development Agency ではリサーチ・アーティストとして、キングストン大学 芸術・建築・デザイン学科では研究員として在籍。
2017 年からインドの古典音楽に伝わるラーガ療法を体得するために北インドのブリンダヴァンにて研修。

■川村文化芸術振興財団 ソーシャリー・エンゲイジド・アート支援助成について
一般財団法人川村文化芸術振興財団は、文化芸術により人々の創造性や表現力を育み、よりよき社会の構築を目指すために2017 年 2 月 15 日に設立されました。当財団は優れた能力を有する芸術家に対し活動を支援し、これまで培われてきた文化芸術を継承、発展させ、独創性のある革新的な文化芸術の創造を促進することを目指します。当財団初の事業として、ソーシャリー・エンゲイジド・アートのプロジェクトに対し支援する助成制度を開始いたしました。
めまぐるしく変化する近年の世界状況に対し、現代美術の関心の主流はいかに社会との関係性において創造力を発揮できるのかという点に集まってきています。アーティストの多くは、自ら社会の中に積極的に入り込み、社会の中でアーティストとしての能力を発揮することを選択しています。本助成事業はコミュニティや社会にコミットし、地域社会や住民とともに制作や活動を実施し、より良い社会モデルの提示や構築を目指す国内のソーシャリー・エンゲイジド・アートのプロジェクトに対して、毎年 1 件採択し助成支援をおこないます。ソーシャリー・エンゲイジド・アートに対する助成支援制度は日本初の試みとなります。助成対象は年齢・国籍不問とし、海外からの応募も積極的に受け付ける予定です。

■審査員および選考所感

秋元雄史（東京藝術大学大学美術館館長）

国内初のソーシャリー・エンゲイジド・アート支援助成制度として開始されて今年で２回目となる。環境問題や経済格差、移民問題など、今日の特徴的な社会課題に対して芸術家らしい提案がいくつも提出された。その中で今年は政治的にも歴史的にも厳しい状況にある朝鮮半島と日本の現状に対して芸術的に介入していこうとする琴仙姫さんのプランが助成対象となった。
また特別賞にはパヴェル・ラツャックさんが選ばれた。２つのプロジェクトに期待したい。

工藤安代（NPO 法人 ART&SOCIETY 研究センター代表理事）

２回目となる申請プロジェクトは素晴らしい内容が多く、また多様な表現領域を跨ぐものなど、最終選考は時間を要し苦労した。長いキャリアを積み重ねたアーティストから若手まで、社会に関わるアートの様々なアイディアが寄せられた。その上でＳＥＡを考える上で感じた課題として、取り組む社会課題への洞察力や、課題を共有する人びとの参加性のあり方、社会全体へのインパクトが不足するものが目立った点があげられる。アーティストのアプローチは多様であり、またそれが求められているのであるが、アート関係者に閉じた表現やアートによる祝祭性やコンヴィヴィアル（陽気さ、懇親的）なものを志向する内容が国内アーティストに多く見受けられた。その中で今回受賞した琴 仙姫は、日本国内にひそかに居住する北朝鮮からの脱国者に光を当てたプロジェクトであり、この SEA 支援助成の方向性を象徴するものであったと感じる。特別助成となったパヴェル・ラツャックは、リサーチ・ベースの映像プロジェクトを地道に重ねる姿勢を奨励する支援であり、第一回からの課題であった海外アーティストへの支援の一歩となったと考えている。

窪田研二（インディペンデント・キュレーター）

2 回目となったソーシャリー・エンゲイジド・アート支援助成の審査は、応募件数としては前年を下回ったものの、内容的には充実したプロポーザルが多く、審査員間の議論も活発におこなわれた。その中でもアートプロジェクトとしてセンシティブな社会的問題に対峙し、綿密なリサーチと真摯な交渉を要する琴仙姫のプロジェクトは、大変意欲的なものであり、プロポーザル通りに実現すれば社会的にも重要な意義を持つものだと思われる。第 1 回目の助成対象となった PortB（高山明）の「新・東京修学旅行プロジェクト」プロジェクトに続き、SEA だからこそ出来るプロジェクトを選択出来たのは今回の大きな収穫であり、琴仙姫氏のプロジェクトに期待したい。

高嶺格（美術家・秋田公立美術大学准教授）

今回 2 つのプロジェクトを選んだ。琴仙姫氏の「朝霞」はおそらく多大なリスクを伴うプロジェクトで、生半可な覚悟では実現しないと思われる。しかし、だからこそ選ばれた。ひとつは、協力者名のリストに実現可能性と本気度を見たということがある。このプロジェクトがどのような軌跡を辿るのか興味を持って見守りたい。（ちなみに審査員の間では、この作品を選ぶことに川村財団側が難色を示すのではないかという懸念があった。しかしその懸念は「問題ありません」の一声で払拭された）
パヴェル・ラツャック氏のプロジェクトには、前段にあたる映像が添付されていた。
そこに写っていたのは、日本の高校に入り込んだ外国人映像作家が、まるで同級生のように周囲に溶け込んでいる姿だった。単純に続きが見たいと思った。

毛利嘉孝（東京藝術大学大学院 国際芸術創造研究科教授）

今回 2 回目の支援助成公募だが、今回はきわめて挑戦的なプロジェクトを 2 件採択することになった。琴仙姫のプロジェクトは、日本と朝鮮半島の政治的な緊張関係が続く中で不可視化されている日本に住む「脱北者」に焦点をあてるもので、「アートの想像力が政治に対して何ができるのか」という大きな問いに取り組む野心的なものである。チェコのパヴェル・ラツャックの提案は、東日本大震災以降の日本の風景を映像によって切り取ろうというものだ。いずれも比較的若い作家の〈未知〉のプロジェクトだが、〈未知〉ゆえの可能性に賭けてみたい。